



# 尾道商業会議所記念館

第42回企画展示

オミチ・パビリオン～尾道大博覧会史～

2022（令和4）年5月27日（金）～10月26日（水）

展示解説



瀬戸内海観光博覧会（左）と'89海と島の博覧会・ひろしま尾道会場（右）の案内マップ

3年後の2025（令和7）年、日本で最初の国際博覧会（万国博覧会）が開かれた大阪の地で、再び万博が開かれようとしています（正式名称：2025年日本国際博覧会、略称：大阪・関西万博）。

博覧会とは、産業奨励、科学技術や文化芸術の振興を目的に、それらに関する成果を集め、広く展示公開する場として、1798年（日本では江戸時代中期）にフランス・パリで開かれたのを最初に、以来、世界各地で開催されて今に至ります。

博覧会を大別すると、大阪万博に見られるような国際博覧会と、ローカルな規模で開催される地方博覧会に分かれ、地方博覧会では広島県内でも数多くの博覧会が開催されてきた経過にあります。

尾道においても明治・大正・昭和・平成と、時代毎に特色ある博覧会の開催履歴が確認されます。尾道初の博覧会となる「汽車博覧会」は、大阪の地方新聞社が主催した汽車による巡回型の博覧会で、尾道駅へ停車した特別列車が会場・パビリオンという、かなり珍しいスタイルを見えています。続く大正時代には、京都を初回として各地で開かれた「全国特産品博覧会」が尾道にも誘致され、尾道駅前西側（西御所町）に展示施設が設けられました。大正末期には特産品博覧会に通じる「瀬戸内海勸業博覧会」が、駅前対岸の小歌島（現在は向島と陸続き）を会場に開かれましたが、どこかミステリアスで不思議な博覧会として浮かび上がります。

昭和になると、産業振興よりも観光振興を主題とした「瀬戸内海観光博覧会」が、尾道を代表する観光スポットである千光寺公園で開かれ、この時に本格的な遊器具を備えた遊園地（子供の国）が開園、3年後（1957・昭和32年）にはロープウェイが開通するなどして、千光寺山の観光開発がより推し進められる契機ともなりました。昭和の末に経済界が主導して開催した「大連・尾道友好博」は、あの大林宣彦監督が総合監督を務めたという、今となっては知る人ぞ知る博覧会だったと言えます。

昭和から平成に移って間なしに開かれた「'89海と島の博覧会・ひろしま（海島博）」は、地方博覧会ブームの中で広島県が開催した博覧会で、広島市内のメイン会場と並んで県内の沿岸・島嶼部各所にサブ会場が設けられ、尾道会場は中心市街地全体がそのままパビリオンであると「尾道まるごとパビリオン」と銘打たれました。因島市（現尾道市）の会場は後の因島フラワーセンターで、因島水軍城と共に因島観光の老舗的な同施設の整備は海島博を起点とするものでした。平成の終わり頃に愛媛県との共催で開かれた「瀬戸内しま博覧会（しまのわ2014）」は、海島博のコンセプトをどこか踏襲するものがありました。

今回の企画展では、そうした尾道に見た博覧会を時代毎に掘り起こし、残された記録から開催経過とその風景を、ビジュアルに観てみたいと思います。

## 明治 尾道駅での汽車博覧会

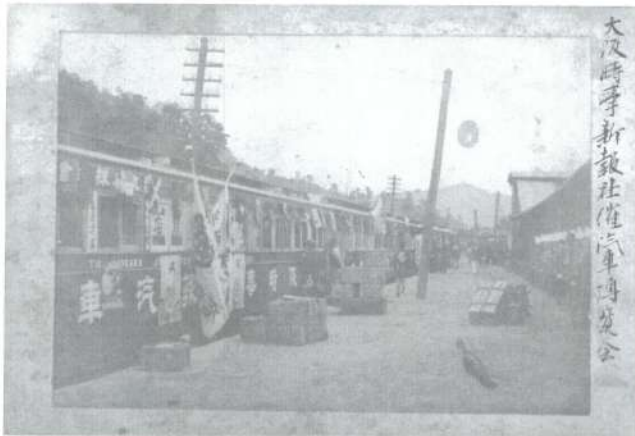
尾道初の博覧会となった「汽車博覧会」は、1906（明治39）年6月14日、尾道駅のホームへ到着した列車が博覧会の会場となるものでした。

汽車博覧会は大阪時事新報社という新聞社が主催して開かれた移動巡回形式の珍しい博覧会で、関西・関東にまたがって各地の主要駅を巡ったようですが、山陽本線沿線では尾道も停車地（開催地）として選ばれています。

当時の地元新聞報道によると、13日・福山駅、14日・尾道駅、15日・呉駅、16日・広島駅、17日・柳井（旧称は柳井津）駅と一日置きに移動しながら開催されたことが分かります。

同新聞紙面には、山陽鉄道株式会社（山陽本線を敷設・営業した国鉄以前の民間鉄道会社）が汽車博開設に合わせて、割引の往復切符を売り出す広告も見られ、鉄道会社とタイアップした博覧会だったのかもしれませんが。

広告に記載の情報によると、晴雨（雨天）に関わらず、全会場とも朝7時に開会～夕方6時に閉会する正味11時間の開催時間で、内容としては車内での各種製品の展示販売だったようです。



尾道駅に停車中の汽車博覧会の列車 尾道市蔵  
列車には三越呉服店や東京丸善株式会社等の企業広告が見え、  
それらが展示販売品の出展スポンサーだったと見られる。

## 大正 全国特産品博覧会

1913（大正2）年4月1日から5月13日まで、尾道駅前西側の西御所町で開催された全国特産品博覧会は、京都を初回開催地として、東京・高知・高松（香川）・米子（鳥取）・岡山と全国を巡回した博覧会で、尾道は続く第7回（箇所）目の開催となりました。

主催者は帝国実業協会（理事長・浅田嘉助）になり、開幕を報じる当時の地元新聞報道には「事業報告」としてその概要が記録されています。

尾道での特産品博覧会は1912（大正元）年12月に決定され、開催年の2月24日～3月10日の工期で施設の建築に着手。その施設（パビリオン）は次のようなものでした。

西館 機械部	50 余坪
東館 各地特産品	40 余坪
北館 尾道市出品	200 余坪
式場兼審査場	60 余坪

機械部という西館は機械設備等の管理棟と見られるので、各地から出展された特産品を陳列する東館と、その内の尾道市からの出展ブースとなる北館がメインとなるようです。審査場は出展された特産品を審査品評する為のスペースだったと見られます。

宮崎・群馬を除く45都道府県その他、樺太、台湾、朝鮮からも含め、出品数は2万5,248点に上ったようで、開会式に寄せられた祝辞には、各地の産業伸張を広く紹介する場として絶好の機会であると述べられています。

また、開催地の尾道は山紫水明（山水の自然風景が美しい）にして海陸交通の利便なる土地だけに、博覧会開催の成果・成績が期待されるとも述べられています。

その期待に応えるように連日多くの来場客があったようで、10日目には旧節句とも重なり特に多く、1万1,600人余の来場者数を見た新聞は報じています。

審査の結果、数多くの出品の中から最高賞となる「名誉大賞牌」に選ばれたのは次の産品でした。

- ▲製粉各種 福岡 株式会社大里製粉所
- ▲製糖各種 大阪 大日本製糖株式会社大阪工場
- ▲清酒菊正宗 兵庫 本嘉納商店



尾道での特産品博覧会記念絵葉書 尾道市蔵  
西御所町に仮設されたパビリオン施設の一部。  
中央に立つ二人は案内役だろうか。

## 大正 瀬戸内海勸業博覧会

開催記念の絵葉書が豊富に残された「瀬戸内海勸業博覧会」<sup>かんぎょう</sup>は、尾道駅前対岸の小島・小歌島<sup>おかしま</sup>（現在は陸地化・向島町域に属す）を会場に、1924（大正13）年8月1日から9月にかけて開かれた博覧会です。

豊富な絵葉書に反して、尾道及び向島側の郷土史誌上に一言も触れられる事がなく、長らく詳細不明の謎めいた博覧会のように目されていたが、近年になって新聞資料からその全貌が明らかなものとなりました。

リアルタイムで報じた広島地域の地元紙「芸備日日新聞」の報道によると、主催は東京所在の帝国博覧会協会で、市当局との交渉を経て小歌島を会場地に決定したのが同年の5月。当初は翌月の6月10日より開会を目指すも会場設営の遅れから7月20日に変更しています（開会式は8月1日挙行）。

勸業の言葉通り、尾道はもとより「中国地方の産業をより一層振興発達せしむるべく」、特産品博と同じ趣旨目的で開催が企画され、産業全般から教育文化に至る幅広い分野の出展（品）が募られました。

地元（尾道市）側では尾道市長を会長、市議会議長と商議所会頭を副会長とする協賛会を組織し、出展する商品等の勧誘を後押しする事とし、博覧会の現地事務所も商議所内に設けられる事になりました。

急ごしらえで突貫工事の施設のようにも映るパビリオンとその内容は次のようなものでした（新聞報道より）。

- ◆出品館（本館）… 集まった出品物の展示
- ◆参考館 … 古今東西の参考資料を展示
- ◆日光館 … 日光東照宮の模型（大型?）を展示
- ◆演芸館 … 舞踊とお芝居を上演（市外から来演）
- ◆美人島 … 裸体の美人を反射鏡によって見る仕掛け

博覧会の本題部分は出品館で、以下は余興施設と説明されていますが、「宇宙の大疑問・世界の大秘密」と謳う美人島なるパビリオンなどは、そのいかがわしい内容からして、果たして問題にならなかったのだろうか!?!と要らぬ心配をしてしまいます。

絵葉書の内には海水浴場が見られますが、こちらは博覧会以前からあるもので、新聞によるとその位置は会場南とあるので、尾道水道に面した側ではなく、向島側に向いてビーチがあったようです（陸地化している為、この南のビーチは現存しない）。



瀬戸内海勸業博の記念絵葉書 尾道市蔵

## 昭和 瀬戸内海観光博覧会

「瀬戸内海の全貌を広く中外に紹介するとともに、新なる感覚<sup>せんぼつ</sup>をもってこの海を分析し、その由来を検討しこの真価<sup>しんか</sup>を再発見して国内資源の新開発をなし、産業、文化、観光、交通など各方面の振興<sup>しんこう</sup>に寄与<sup>きよ</sup>し併せてこれが基地尾道、観光都尾道の大躍進を期するべく本博覧会開催の運びに至った次第であります…」

以上が戦後尾道で最初の博覧会となる「瀬戸内海観光博覧会」、通称・尾道博の開催趣旨となります。

観光尾道のシンボルである千光寺公園<sup>せんこうじ</sup>一帯を会場に、1954（昭和29）年4月1日～5月20日までの会期で、広島県・広島県教育委員会・尾道市・尾道市教育委員会の主催、通産省・運輸省・農林省・郵政省・文部省・労働省・建設省・日本国有鉄道（国鉄・現JR）等の後援、尾道・広島商工会議所等の協賛により開かれました。

施設はパビリオン本体部と附設となる「子供の国」で構成され、メイン・パビリオンでは、瀬戸内海地域の総合開発の構想を一大パノラマによって再現され、続いて内海の歴史や国立公園としての瀬戸内海の景観<sup>けいがん</sup>や情緒が、パノラマ・ジオラマ・写真等によって紹介されました。

これに続くパビリオンとして、戦前までの博覧会に見られた各種産業製品の蒐集<sup>しゅうしゅう</sup>と展示が、「国土の産業」（全国と広島県の優良生産品）、「お菓子の国」（全国の有名菓子類）、「農村と科学」（科学的農機具）、「生活文化」（近代生活に最も関連ある各般の優秀製品）のテーマで見られた他、日本専売公社（現JT日本たばこ産業）による「たばこ館」、国鉄による「国鉄館」、郵政省による「郵政館」、日本電信電話公社（現NTT）、放送局とラジオ・テレビメーカー等の協賛出品による「テレビ館」と、協賛パビリオンが複数並びました。

## 昭和 大連・尾道友好博覧会

尾道商工会議所と中国の大連市の主催で、1987（昭和 62）年の秋、西御所岸壁をメイン会場として開かれたのが大連・尾道友好博で、尾道市と大連市が友好都市にあったことから、経済界の側から企画された博覧会でした。

その開催発表の記者会見では、尾道出身の大林宣彦監督がイベントをプロデュースする総合監督として出席し、これに参画する経緯と構想について、次の通り述べています。

「私のふるさとであり可能性のある土地。ロイヤルホテルから歩いてくると海風の臭いが甘くておいしい。地元の人には気づいていない。うぶな風土に活性化が生まれる。今、たずねてみたい町に尾道がナンバー 2 に入った。秋という時間をもって夢、色、心、イメージづくり、具体的なものとの出会いということでこの催しを引受けた…」

主催者である会議所では、物見遊山イベントではなく、「尾道市全体をライブ・ステージとした『グルメ志向』『イベント参加志向』『カルチャー志向』など各人の価値観に基づいたものを演出しており、このため尾道を舞台にした名画のフィルム・マラソンとして上映する尾道映画祭も企画、十日間の入出を十万人見込み、費用は物産館やレストランなどの売上約一億円でまかなう独立採算制」とあり、概要と計画を説明しています。

大連友好博の目玉ともいえる「尾道映画祭」は、公会堂（旧市庁舎に隣接して所在したが現存しない）を会場に 10 月 30 日～11 月 1 日までの 3 日間にわたって開かれ、大林監督の尾道ロケ作品から「転校生」、「時をかける少女」、「野ゆき山ゆき海べゆき」が上映された他、大林監督によるムービートークショーが繰り広げられました。また、映画祭とは別に、大林監督による大連博オリジナル作品として、「夢の花 大連幻視行」が制作されている事は、今となっては知られざる逸話といえるでしょう。大連の紹介ムービーとして作られた同作品には、原田知世の姉である女優の原田貴和子と、同じく女優の浅野愛子が出演（原田は「彼のオートバイ、彼女の島」で、浅野は「漂流教室」で、それぞれ大林映画の主演を務めている）。劇中音楽は、後に「愛は勝つ」が大ヒットを放つ KAN が担当しました。

こちらは映画祭では上映されていないようですが、メイン会場となる西御所上屋 1 号倉庫（現尾道駅前港湾駐車場）で公開されています。因みにこの作品は一般に出回っていないだけに、半ば幻の一作のようなものがあります。

2017（平成 29）年から、大林監督をゲストに招いての「尾道映画祭」が新たに始まっていますが、大連友好博で企画された「尾道映画祭」こそ、まさしくその元祖と位置付けられるのであり、大林監督自身も尾道映画祭 1 回目のカウントは、第 1 回尾道映画祭から遡ること 30 年前の、大連友好博の時と見ておられたそうです（大林監督に近い関係者の証言より）。

## 平成 '89 海と島の博覧会・ひろしま

平成の時代が始まった年に、広島市と県内の沿岸島嶼部にまたがって広域に開かれた博覧会が、「'89 海と島の博覧会・ひろしま」、略称・通称「海島博」でした。

この前後は全国的に地方博がブームとなっていた時期で、前年にはお隣の岡山で瀬戸大橋博が開催されました。

その発端は、開催 4 年前の 1985（昭和 60）年に、国土庁から広島県に対して、海島が持つ文化・資源を見直し、新たな発展を模索する「国際離島フェア（当初はシンポジウム）」開催の打診が寄せられた事に始まります。

この当時の広島県は、円高の進行等により経済環境はすこぶる悪い時期にあり、地域経済立て直しへの起爆剤としても、離島フェアを前身とする海島博の開催は、大いに期待が寄せられるものとなりました。加えて共催者でありメイン会場となる広島市としても、89 年は市制施行 100 周年・広島城築城 400 年という大きな節目を迎える年でもあり、これを飾るにふさわしい事業として歓迎される事となりました。

「海と島のグランドデザイン—輝く海と島と人」をテーマに、「海と島を考える・知る・創る・行く・楽しむ」を構成概念として、7 月 8 日～10 月 29 日の会期で幕開けた海島博は、広島市西区のメイン会場に加え、沿岸・島嶼部会場として、因島市（現尾道市）の因島フラワーセンター・大浜崎公園会場、安芸郡蒲刈町（現呉市）の蒲刈県民の浜会場、豊田郡安浦町（現呉市）のグリーンピア安浦会場、瀬戸田町（現尾道市）のベル・カントホールとサンセットビーチ会場、福山市の鞆の浦会場、沼隈町のみろくの里・境ヶ浜会場、そして尾道市も千光寺公園他が会場地となりました。

尾道会場は、「尾道まるごとパピリオン—人と海と文化との出逢い」をテーマに、現おのみち映画資料館の土蔵が「オトピア館」という展示館となり（本四架橋のパノラマや船舶模型、中世尾道遺跡の出土品等を展示）、ここを拠点として千光寺公園から旧市街一帯をパピリオンに見立てました。

パピリオンとしてのまぢめぐりを、より深く楽しんでもらおうと、尾道再発見をコンセプトとした『気ままに尾道…散策百選ガイドブック』も制作・発行されています。因みに同ガイドブックは、2004（平成 16）年に『尾道散策 204 選』として増補改訂版が出されています。



尾道会場のポスター  
（左）と散策百選（右）